

(第3種郵便物認可)

原発事故受け福島の鮮魚店廃業

神戸で誓う再出発

東日本震災に伴う福島第1原発事故を受け、福島県南相馬市で父の代から約40年続く鮮魚店を廃業し、神戸で再出発を目指す男性がいる。福島県沖で取れたコウナゴから一時、食品衛生法の暫定基準値を超える放射性物質が検出され、「安全と言われても、もう客足は戻らない」と判断した。「生活をめっちゃくちゃにされ、国と東京電力には怒りしか感じない」と悔しさをにじませつつ、家族を守るため職探しに追われている。(上田勇紀)

北区に移住の藍原薫さん

藍原薫さん(50)。妻奈一市北区の市営住宅に移り、長女樹莉亜(33)、長女樹莉亜(33)、長男礼央君(4)、長男礼央君(4)の親せき宅に身を寄せ(3)と、4月9日に神戸だが、知人を通じて神戸

家族守るため 職探しに奔走

国と東電に怒り

市営住宅の受け付けを知り、「もっと原発から離れた」と申し込んだ。薫さんは南相馬市で鮮魚店「藍原商店」を営んでいた。マグロ漁船の漁師だった父進さんが約40年前に始めた店だ。切り盛りしていた進さんはがんで4年前に亡くなった。生前、「(店の)面倒みてくれな」と話していた父の願いに込めようと、薫さんは横浜市の会社を辞め、帰郷した。鮮度を一番に考える父の教えを受け継ごうと励

む薫さんに、常連客は「慣れてきたところに地震がこの刺し身でない」と、子どもが食べない」と喜んでくれた。市場での仕入被害がなかったが、緊急時避難準備区域に指定された福島第1原発の半径

30き圏内にある。薫さんは「父が大事にしてきた店だから廃業に迷いはあった。でも、子どもたちを安全な場所で育てたい思いも強く、やむを得なかった」と語る。神戸に移り住んでから



妻奈々さんと、長女樹莉亜ちゃん、礼央君を見守る藍原薫さん(右) 神戸市北区